

日日翻訳 ～誤訳の楽園～

減多少増(20230903-20230925)

1.

日日翻訳とは、日本語の文章を日本語の文章に翻訳することです。たとえば、この文は次のように翻訳できるでしょう。

「日日翻訳とは、日本語の文章を日本語の文章に翻訳することです」

確かにこれも日日翻訳ではあるのです。しかし、この訳文は原文とまったく同じ文です。

翻訳とは原文の意味にそった訳文を作ることが目的ではありますが、異なる言語の間で原文と訳文をまったく同じ意味にすることは不可能です。ということは、翻訳とは、原文と似てはいるが異なる意味の訳文を見出すことであるとも言えるでしょう。

故に、日日翻訳でも、原文と異なる意味の訳文を探究するのです。

2.

毎日の翻訳とは、日本語の文章と日本語の文章を順番にこすることです。かといえ、この文は何か欠けているかのように扇動されるでしょう。

「母の日、本日の鶏の言い訳は、言葉の文章を木曜の話す五つ子の腹巻の文様とするです」

確かにこれは明るい張扇なのです。しかし、この訳文は原子が止まった回文です。鶏の言い訳とは、原子の風味を取り去った残りの文を作る言葉が目玉だが、果てしなき語彙の間で祖父の鯨尺を待って、同じ隠し味にできるのは熊肉です。

問いは語ること。翻訳とは祖父以上で入り、限界のある味付けの理由の交わる場所であるとも言えるでしょう。

古くから、明るい鳥の這う跡は、原料の果実たる味噌味の液体で茹でる兜蟹です。

3.

苺目の盤面は、本日の悟りの分量と目元で語る女竜の煩惱にこころをすこしです。いいかえれば、何処かの交点でイルカの似顔絵が描かれた重力扉でしょう。

梅の甲は木目に沿った魂の言いなりで、水槽に落ちた葉書の分量を話す丘鼠の竜巻の構文である。

おそらく二つの胃を持つ張飛です。しかも、説明2は原因が予め正しかったも同前です。鶏の高い駅には、勇しい子供風妹を取り締まった浅い祈りの文を許す葉巻が白玉だし、貝とてしくなき誤藁の間に、組斧と兄鯨の侍が、同時に鰭三昧に出る熊の内です。

問11で悟ること。翻訳とは六組に似ている。狼田介のある日、理由付けをする前に誤り、悪い心であるともないとも。

十の口の日、月にいない鳥の違う変な足は、原因の結実たる未曾有の粘性で茄子がいて完動です。

4.

兎目の能面は、木目の悟空の冷栗と目方を計る女優の樟脳にこころ鎮めたまえ。いいかわるいかは問兎の交尾と仏力の偽續会が猫の枯れた重力跳びで決まる。

拇の岬には木曜と日曜に三分の魂のおいなり様で、水筒に落ちた楷書の分散を溶す窮鼠の最終巻の縄文がある。

おそらく二つの軟膏の侍張り手だ。さらに、喪服？あるいは源田が子供を門前で見なかったから。鶏肉が高価では、鰯のおいしい粉末の蒸溜した涙を祝う衣の裾を竜巻で白面にする。頁には果てしなき蕎麦の闇が、組紐と兕鯨の甥ならば、何時でも敬老の日は同じ味を出せるのが幕の内です。

一と一の間で二を悟る。語の順番は蛆の穴に似ている。猿申介の日記によると、狸虫村を出る前に鈍い亜流の心である。友達はいないとも。

土の口にある目は、月代をついばむ鶯とは違う麦の足は、因幡の結石である。末讀會の先生には芥子がいるので発電です。

5.

木星の五番目の逸脱面の空で、冷し海豹が助言する憂鬱な脳はこころ棒を舐めたがる。イカを代表する代表イカは、問兎と仏の靈力により交信し、猫の舌の上で重ね跳びして偽續会の決議をする。

拇岬では木の櫓と白い櫓に分かれた三匹の狐の魂が、水笛の音さえ楷書で書かれた大敗を、窮髭龍の咆哮で知らせる。

おそろしい二人の侍の軟便張り手だ。さらっと頓服派あるいは原油派の子供を詰問する耳と戦った。渓谷の高低差は錫もしおらしく毎分二米で蒸溜した涙を拭う夜の裾の竜頭を自在にまわす。夏には果実がなく、嵩高の冬にある闇は、東組所属兕鯨の鰓だから、屈折した幕府の回線を改良するのは阿吽です。

一と一の和が二である。単語の順番は蛸の谷で批准している。猿申介の日記によると、狸虫村では以前、純粋な亜鉛の流行があった。それでは速達が届かない。

土の口には目があるが、草履を履き違うので月謝が足りず、つい滞るという。因果の結論である。末讀會では芥子先生が発電します。

6.

五番街の本屋の脱税額には上の空で、冷やし海綿を食べている蒼鬚の悩みはこころ棒を跳びたがる。以下の代理の代理料金は、問兎と仏の零蟹よりも父を信じた。虎の香りの重力で解脱していたために積荷が決壊したのである。

母の甲で櫓が大きくなってから自分を超え、三つに割れた子豚が逸れて、水滴の音に怯え階段で躓いた犬の腹を、窮髭龍の虎吼で倒す。おそろしい二人の侍の軟式張り手でだ。サラダにも頸動脈がある。いやな油蟬の翅脈も門番詰所で子供向きの茸と戦った。埃の谷は底高く駅もない。おかしのような蓋然性の粉の海には涎が溜まっていて羞しい。自ら夜の袴を祓い、どの頭を打たせるのかは滝に任せている。夏には果てがなく、寒さ割増の冬には栗がない。金属紐の束は所により鰓でできている。幕府の光回線を阿吽で解析し、向きを鬼門に改める。

一と一の和が二である。精巢には芳香剤溶液が堆積している。猿申介の日記を辿ると、以前、狸虫村には純米杵の亜光速船が流れ着いていた。その船の速度では村には届かないはずだが。

国には目があるが、覆面軍は偉いので月の斜面に堤を作った。熱を帯びる質問合戦。これが因果の地平線である。

未読會では芥川先生が発言します。

7.

五番街の本屋の脱衣所の上空で冷凍海鼠を食べている斉藤の脳みそはこのごろ神を崇めていた。以心伝心の代理料金、関税込みで仏の零蜜発の交信をした。虎の香りの香力で解説していたために責任があると決心したのである。

母の甲冑が大人になってから脱臼を訴え、汀で分かれた小指は、遠く永遠の髻髪龍の虎吼を真似た音猿が階段で跪いて、太腹に至る。おそろしい吐き侍の回転式帳面でだ。甘干汁に軽動略が合う。いやあの油禅の釈尊も門前払出しでお供拔きの口に挟まった。喉は底抜けに高温で蜷もない。おぬしのような蓋然性の梅涎の粉末は誤差の留守番だ。白い夜に跨り躓く。ドの音を鳴らせるのは俺に任せられている。彼には量がなく、咎める害僧の客には悪がない。金属班の束は偏り鱗でできている。犀宛の膀胱を阿片で回折し暗号を解く。それから、向こうにある難問を攻める。

つーとつーがワである。精巢は芳香済み溶夜があると推理している。猿申介は日記の仙人であり、荊似の中樞炎では、柿木掠りの亜光速船が漏れて青色だ。その麴の温度では炎には燃えないはずだった。王には目があるが、方面軍は脆いので月の裏面で城を作った。茶を浴びる質量合戦。これが因果の地下牢である。

未読会では芥川先生が講演します。

8.

五疊紀の木星の脱皮所の天空で冷感海鼠の倉庫を荒らす。宵闇に蛇味そばの胡麻油を舐めていた。一子相伝の代金未納、関節絡みで仙術蜜餞の味見をした。虎の胃を借りて極力解毒していたため、たらいが靈妙であると気づいたのである。

舟の甲板が大火になって脱出と排水だ。灯で分かった小心はす速く氷結した。怒りの影で虎鐘が吼える。真実上の音真似だ。音は遠く有段者に囁いて大船に乗る。おぞましい回転式吐時計の二面鳥だ。梅干し汁に軽音楽が合う。いや、猫禅の意識も前問の出題でお肉拔きの罠に嵌った。底抜けに候。高校では友人もない。おむつはいらない。海涎の顛末は蓋然性の誤差の留年組だ。白い衣に袴で頷く。どの音も平均すれば俺に似ている。彼には量子がなく、否みは割と増えていく。客観的には赤がない。金属音の扁桃風は隣にいる。扉屋の傍聴は片肺で回り道、暗渠に落ちる。それすら同じである。汝を誰何する。

モールス信号だわ。成果は芳一の耳。夜に溶かしてあるはずだ。猿の仲介は日溜まりの佃煮であり、流刑中の肺炎は、掠の木に留まる。それでは、船の尖端が遅れて春足だ。温度靴は淡く照りはずれだった。建国の日、片輪運転は不安定で、月面の畳で城を作った。答を媚びる質問合戦。これが困惑の池撈である。

末尾会で芥川先生が講演しました。

9.

五疊紀の木星の脱毛所の天使は快感海賊の食事を忘れる。空間で鉛筆近くの蓖麻子油を咎めていた。釜時代末期、ひとりっ子相談の関節関係で仙術洞窟の下見をした。虚構の指が、磁力分解して炒めたくらくらみこそが電場であると気づいたのである。

船の甲板が大小を伴い兎出と俳句となる。釘で分けた蓮の芯は、小結を追い、蚊を虐待する。真実よりも音程比だ。茸は有害な昔に背き、船は大海に出る。おそれまいおす回転武士はこの時計面島にいた。千十海で軽い茸を楽しむ。誰にも会わない。猫弾の意欲も門前からの出場で、内向きの窓に挟まった。低気圧技だ。高校では友人が燃えた。おむれつにはうらみはない。海艇の顛倒で、燃焼性の証明が留保された。自らの依存性に気づく。どの音も平均された俺を煮ている。あの量子は泣く。否定は割合であり増加する。観光客はそこにはない赤い庭のようだ。金属製の偏西風は鱗になる。扉屋の人徳は傍の耳にあり、肺の欠片が回転して、落ちた黒梟に導く。それらは同じである。渚で誰かが何かをする。

小さな信号機だった。果実紙は万一のため、耳の溶液にしてある。恥ずかしい猪との中間には歩留のよい佃煮があり、流砂の中の燃灰は、掠傷を縛る。それでは、船首が尖り春の遠足に遅刻する。温度砲は淡水で明かりは、ずるだった。腱が固り片目は輪になって運よく転がった。不安な体で月面の畳では誠の酢だった。筈なのに眉が振え、槍楯合意。これが国境の池袋である。

末尾公園で芥川先生に会いました。

10.

七畳時の本当の手抜所の天井は鯨間海道的車掌に恩がある。空間で筆沼辺の鹿田麻子を褒めた。時代巻本朝「ひ」と「り」は子供組の淡い関係節を繋ぎ、仙術同室を頂いた。虚構の脂が滋養を分解して、それを炊いた砂のくらくみが雷揚げで鳴る汽笛である。船の甲板は大小あり、汗兎とデトックス俳句となる。針が刺さった誰かの心は、小花に迫り、虹を優待する。事実よりの捏造音だ。耳は有毒より昔を背負い、船長は後悔する。おそれようとおそれまいと旋回式土はこの時計の良好面である。1010苺を軽く耳に案ずる。誰の絵なのか、猫弾丸の終章も筋力からの出発で、肉向きの窓も締まった。低気圧こそ絞技だ。高校では仙人が自然だ。おつれの埴輪には脂身がない。掃海艇の罵倒で、萌え萌え性の証明証が発行された。それを仔羊の背に貼りつけ、動物の約半数の竜を煮てみる。あの流星は流れ、杏仁豆腐定例会議ではカリフォルニアの僧侶をする。光の観察者はそこではなく赤い底辺にいるらしい。盪属性の偏頭痛は鎧になる。星扉の人は特に索引の耳であり、肺の欠伸が回転して、黒蜜に落ちる道だ。それらは同じである。誰かの描く何かである。

信号の川は磯に続く。果実新聞は一万頁あり、取扱いに余裕がいる。職業猪の仲間には保留された個室があり、流砂を中火で灰にしてから、傷鯨の博士である。それからは、大小の船長が青色の速足で牽制する。温涙砲は淡水なのが明らかになり、嘘泣きだと分かった。膝が固体で目は輸入したので、蓮は乾いていた。妥当な札を月面に貼れば、畳鮫は酸性だ。苔なので眉が燃え合意結婚となる。これが因縁の波袋である。

未公開でも茶川先生はいました。

11.

互雲寺の本物の手折所の天井には街道鯨の間屋があり掌底が得意である。空耳を聞く土筆の沼辺では、鹿である理由は麻鼠しか知らない。代用時間で育った竜は、朝のひかりを食べ予言組織の渋い関節技を凌ぎ、同型仙術を極めた。虚構の豚が磁界を理解しそれを欺いた秒のくりこみが電場を囀る雷孔である。大阪の船は小亀である。汗兎は解毒俳句を詠む。誰かの棘 汁は心の 兎 追い。紅餅の憂えである。事実に近い捏造は音がする。耳あり苺ありの首が裏切ったときの傷。船の全長は海に落としてきた。おそ派のようまいは旋回武士の時計がよく好きな顔をしてい

る。十ビット毎に耳を搔く計画は誰の構想なのか。猫狸丸の柊童も協力して出発だ。肉風も窓も諦めた。低気力と鮫皮だ。校門では仙人類の自動化。おつむの指輪には脂肪がない。掃海艇は直列で、崩踊りの証明弾を発砲した。そして仔羊が背で鮎をつつく。動物の約半身は竜に似ている。あの流体は蜜で、豆腐否定反対会議ではカリフラワーのリニアな増加にも反対する。光の観念警察官はそこではなく赤い渡辺なのらしい。盤面性の偏差値では金時豆になる。異星人は特に耳を牽引するが肺の回転が欠落しているため、暗黒面に落ちる蜜道だ。それらは同じ誰かの猫の何かである。

信号は川の腕となり招く。真実新聞は一万頁で取材は全人類がする。職業病の仲間は留置場の独房におり、妙流が吠える圧力にしても、傀儡の博士である。それから、看守は船体に沿って遠足し人蔘を食する。湿涙砲は淡力で明るくなる。虚構投げだと引き分けだ。膝を固定し目は錫入りなので、蓮根は乾いていた。失礼な妄想の片面が枯れれば、畳殺しには賛成だ。笈鳴りが燃え届くまでの間に結婚する。これが因幡の波婆である。

先生の茶水はいまも未公開でした。

12.

井蜜寺の本殿の毛折魂の二人井には概要鯨の問題があり掌返しが得意である。空と耳の間では、土星の右辺が厩であり串狸の麻縄が和んでいる。杖門侍の間では、冥府の滝は朝にひかり夕に干す。昔の組紐で法に関する枝には瑕疵がある。手術と同罪で極刑となった。嘘塚の横にできた磁界の溶鯉はそれを繰り抜いた絶妙の吐息が電場で啜る雪孔雀である。大阪の船は小顔で笑う。免税の排毒句会に挑む。誰凍る 汗の中追う 兜面。赤飯の優しさである。事情に疎い鑄造は吉とする。耳あて目あてをつけた首が振り返ったときの鳩。船の全文は貉毎に書くものとする。遅波の陽と舞は螺旋式±σ時間の間、自由な顔を指さす。それぞれの耳に蚤のビットを加える計算は唯の譜帳なのか。猫九狸は柊量を脅迫して出獄だ。肉のようなものの総量である。抵捻力で敏感になる。校長は類人山の白重力なり。指摘されたのはおむつの要旨ではないか。掃海艇は崩通りに直進し、照明段は発条式だった。そして半妖が火箸で鋏を叩く。臓物の約前身は俺を煮ている。あの流派は雲で、豆蔵盆我逸脱会議の造花を真っ直ぐに並べたような凧に乗った僧も脱衣する。念のため尖端を観察する管は、そうこうしているうちに示す小さい右辺らしい。銀面を担ぐ偏は差で旁は金の時に空白となる。黒星人は怪しい耳を索引でひくが柿の回廊で欠伸しているため、鳥裏面で洛北の南蛮焼だ。それらしく同じ難しいほうの猫の何かである。信者は川で腕を鳴らす招き猫。真実新聞は一方が真でも全面材の取り外しは類をみない。豹に臙業をかけても中間のあたりで留意する場合、孤独になる。妙法を唱える区分にすると、魁夷の伝説である。それから、着衣の裸体に塗った紺足り人蔘を踏む。湿地渦は三日月を要する。虚構殴りだ。引き分けだ。膝が固体で目は蜥蜴人なので、毛根は乾いていた。失念した忘却の欠片が桔梗なら、皆殺しには賛成だ。眉を撚ねって解答する間もなく結論とする。これが因幡の婆派である。

奔出する衆生は松風でした。

13.

柊密寺の本堂にて主斥課の甘物には沈殿鉛の門扉があり反転すれば象裏である。空月間には土蔵の近江の蔵があり、豚息の魔林を知っている。

羅材門の侍は、蓑傘で湾へ潮干狩り、タヒチです。昔の番組で法律に反する虎には虎斑があると手業と胴場で極度の荊になった。嘘嫁は橋にいて磁気の溶かし鱈を操り、枝についた緑色の呼吸

が叶う。雪印産の電気湯を浴びる。大漁船は小径に至る。満悦で匂麦を拝み、桃に会う。凍るのはただ。切迫の件。兇悪。寺跡の憂である。壺状の硬い螺旋は舌とする。耳あり目ありで尾行した頭部を振り回し鳩尾にあたる。駱駝の母に、一般の構文ですぐに手紙を書く。偏在する光と運動を螺旋技と比較する合間に自白剤に指をつける。それから耳蛭は兎の如き箒星となり、鴨並に唄う。神描几は質量が弩級で出発だ。つまり用のないものの総量だ。

捺山氏は敏感である。尾を咬めば、類人は山ほどの重助となる。指導されたのはおむらいすの要約ではないか。掃除法廷は崩壊したままで直線である。証人役の発表会だった。そして半妖が木餅で紙を焼く。臍物の豹は前世では俺に似ていた。あ行の霞は流れ、小豆の盆栽は都々逸の会では、進化の境を凌ぐ直角な平行線を組み合わせた風の乗客も増え脱皮する。念を込めた小犬の糞を観測するブラウン管は、そういう指定である。内部に示す小さい右近のようなもの。鏡面の研磨剤は偏りはあるが近傍では金がかかる。色白である。星星人は険しい弱軸を引き取る。肺が回復し欠場しているため、黒鳥顔では凍北の南濡燃だ。それもしくは同じく離れた方位の化け猫である。信長は川で喉を鳴らす招待猫であるが、真剣勝負は一方が真剣でも全面道場の取り扱いは類をみない。豹に職業を尋ねても中間管理職で留年する場合、独楽になる。妙法を唱えれば苦もなく分別を無くすなら、蝦夷にも伝染するだろう。それかもしれない。着衣は裸体に塗れる。紺とり人蔘バスを踏む。着地地点は三月三十日で要約できる。虚構殴られ嘘振られつまり引きわ蹴りだ。膝が胴体で目は新婦人。だから、星大根は板の上。失恋したことを忘れ、脚の次点で問題ないなら、皆勤賞で協賛だ。眉を燃やして解凍する間に結露はとける。これが橋で困った波女派である。

斧出衆は生の松に似ている。

14.

枳蜜柑の本体は拘甘に訴追され沈没船の關扉、斑点こそあれ裏像である。月空の闇には土星の近日感があり、窒息する麻疹を知っている。

羅生門の侍は、千の港を糊づけし蚕狩りするダビデです。

昔の番付で西の彪津板に蒙古斑を手作業でつけた胴元は極度の襟になった。虚像は横にして磯の気配で熔鰐を操り、股から酸を吐く色々な呼吸が合う。電気印の蜜湯売りが溶ける。大漁砲は小口径である。茶蕎麦を満喫し桃を食う。齧るのはだめだ。半分に切れ。黒玉だ。手跡の裏である。秋壺の舌の碇に施錠した。自愛自求の汚室で頭脳を振り出しに戻し鳩屋にあれ。舟の操舵手は一筆で雑文を書く。すぐれた五篇の手稿だ。死と連動する捲巻腕に兆の咬み痕。目白済みの合図は脂肪。それが耳蛭禿の叩く毒畳であり、鵲豆を狙っている。凡袖油は質感が怒塗れで出過ぎる。つまり、用もなく器用だ。

椅子代は高額である。尾の粒子は類なき山肌の重箱となる。指摘されたのはおもしろい蛮族ではないか。帰謬法では任意のママが懐妊すると直訴できる。怪人の発明展では蛇足として平坦な板鍋で綿を炊いた。腕捲の豹は前回は竜巻以上だった。め作りの霧は晴れ、小脳の我々は独楽の会でまわされる。進化の壁を塞ぐ実直な平行線を組み立てた蚤の動力も増税する皮膚だ。念の為、大小の糞に感動するフランス人はそういう設定である。内心は仏の右丘のようになまけもの。境界の研究生は訛りはあるが右隣では余っている。空白である。生星へは瞼の弱い袖を引く。姉が回転し欠損しているため、黒願島の東北には南燃諸島がある。それもしくは同じ難儀な方の化学の学位で猫になる。信頼川で候。猫はロラス島に招待され、実質勝負は一万回真実でも全て国道で場所が取れば吸収できる。頬骨である。豹は就職し尋常な仲間と管をまいた。埋蔵された留数の場合、独学である。文法を間違えれば苦もなく別の文になるだろう。焼蝦にも伝えてお

け。それから死ぬがいい。青衣だと踝が大きく腫れる。紐とり人と参加型バス。着衣地点は三月三十日で予約済み。虚数に殴られた振動は嘘つきの引き際だ。誰が胴体で何が天婦羅人か。つまり、大きな恨みをもつ星はいたのかいなかったのか。失望した蛸の脚を忘れたのは、脚の欠点であり、問題ではない。皆川勤は賞をもらい、副賞は協奏曲だ。屑を燃やして解決する問題は解けた。これが嘘で固まった彼女の旅である。

午になると茶毘出衆は順番に顔真似をする。

15.

杵密君は本能で猫耳に追跡された沈殿船の扉を開く。斑点こそが黒猫である。空月の音には土曜日の安心感があり、休息室で針を打っている。

裸体で待つ間、干港が湖になるまで、素材から旅に出る。借金の形に、西から大津班、妄古班を手懐けた作戦を極めて評価した道元は、奢る度に鹿になった。

巨象は横たわる。幾つもの気泡が顎を溶かすがすぐに燥く。酸素役の勉は叫ぶ。阿吽の谷で叫ぶ。電気圧で飴麦湯が痣になる。犬魚家は小日経である。芋慕春の満月は夏を跳ぶ。麗しき膚だ。手分けして叩け。竜王だ。寺跡の墨衣である。そこで一句。秋聲の百舌の淀に旅の鍵。

白白白剤を教室で服用し、脳が頭から出張に出て鳩槃荼になる。船の羊は一気に雑水を食う。すぐれた五穀の収穫だ。花と違う動きをする絞韭は捲湾宛に跳び狼咬み。目白に住む絵師は堤防である。それが耳朶禿の叫ぶ苺畳であり、諄豆を担っている。相蜜柑への質問は感情的で怒りを出し過ぎる。つまり、同じでなくかつ同じ器だ。

椅子代表は高慢である。民衆は夥しい山々の動機となる。招待されたのは主に知らない驚愕ではないか。予め任務が直線妖怪だと知らなければ驚愕しただろう。妖怪を発見すれば蛇は足でまとい。平和な坂渦で綿毛を吹いた。

胸髭の豹の前年の順位は龍虎の上だったのか。霞で蜻蛉を作り、脳山の自我は孤独の会にまわす。進化の壁は寒い。直角で並行な線を引いた蛍組の動向も注目だ。背理法である。偽の窓から大小の罌を発見した。次は汚れそうにない定説である。内情は私の右左にただようなまけもの。雑学の研究生は、靴は履くが右足が余っている。空自である。生還への望みは薄く油を引く。肺は回転し欠場している。黒順鳥の東翼には南の島のにおいがする。それをしくしく同情して泣く化け物の方が、宇宙では猫となる。

天気予報は信頼できる。ハロ―猫が最後の島に招待された。実力勝負では一方的に見えても、実は全国の道德取扱所で買収できる。賄賂である。釣鐘の運試しでは、尋問の間中、草を食べていた。偶数の場合は理解された。狐文字である。文法に間隔があれば吉。別の文が似合うだろう。焼酎でも飲んでおけ。それから死ぬかこい。着衣と裸では大きく異なる。紐育人と人蔘加熱風呂。着地点は東経三度北緯三度に予測された。鼠数に齧られた空振りは実際の引力の嘘だ。唯の胴体は何らかの森羅万象である。

祭は大木の根元で星は板の腕ではなかった。聖人の娘は概念。慨の欠如であり、同量ではない。皆既日食はもろい。部族は協力者の屑を慕って氷解する。同情は挫けた。これが、虎が困った方の彼の旅である。

牛にたとえると茶毘布は質素な偽真偽である。

16.

杵松君は猫耳の本能で追跡した沈殿船の扉を開いた。斑点こそが黒猫である。空っぽの月の東には土曜日の安心感があり、休憩室で針を打っている。

裸体で待つ間に、干芋が糊になるまで、素材から汁を出す。釣鐘の形で、大津波や懐古趣味を配る手配をした。うわの空の作り話は酷評され、元の作品の価値もない。着る服も襤褸になった。言葉は横柄だ。幾つもの気配が頭をよぎるがすぐに消える。酸欠で勉強すれば倒れる。阿修羅の顔で倒れる。電気鍋で給食が唯になる。犬魚顔は少食である。芋と満月を食べて寝るからだ。麗しき胃だ。手賄いで炊け。燻玉だ。時間の息継ぎである。そこで一息。秋風の猫舌の椀に旅の鐘。

自白剤を自習室で服用し、白い脳が頭から町に出かけて極楽町になる。鉛の半分は大気と雑草である。すぐれた五感の修練だ。花を纏う動作の絞技は、腕絡みに縄跳び込み。白目で悼む装飾の横暴である。それが目染発の苺飴であり、豆畳を背負っている。相談室で質問すると感傷如来が出現する。つまり、同月同日生まれた。

椅子男爵は高齢である。民衆は猛々しい発動機の出力となる。接続されたのは主に知的暴発ではないか。予防接種が皮下注射だと知らせない電撃作戦だったのだろう。効果が発現すれば舵を足で立たせられる。平坦な坂道で禿毛を抜いた。

陶器の豹の前足の位置は腰痕の上だった。霧で蠅螂を欺き、脳山の自宅は孤立した命に似ている。進化の愛は尊い。直売店から空港まで行くのに蛍姐線に乗り換える動物は駄目だ。背理法である。命の窓から小犬の魂を発明した。次に決めるのは定義である。感情は仏の左右の嘘すら見抜けない。進学する研究生は靴を履いた右足がにொっている。是空である。環状の脂身を薄く切る。

姉は回転し欠損している。黒嘆鳥の翼の束は馬の首側の追い鯉。それはハニーと呼ばれる硫化物であり、宇宙の底である。

天気予報は信仰される。ハロ一鼠は最高の馬に修正された。実数は全体的に道徳的で、線路のある取扱所で売買される。釣鐘座の運行は、朔の間中、掌の上だった。重力場の偶然だと狸は言う。これが狐の文字である。文学に関係があるという説は古い。他人の空似だろう。

焼き討ちで飴をもらう。あるいは束か恋。着衣と裸ではどれを貰えるのかは大きく異なる。肯定入りと加熱肉入り。着衣で点前し、東に三拝北に三礼と予定。嘘のような話だが、鼠数で数えられた空間振動数が実引数だ。桐箱実験は唯の森羅万象である。

大根の元祖は濃茶の精や坂道の霊ではなかった。星人の娘は概念。龍の欠如であり、銅畳ではない。皆既日食はもういい。部隊は協力者の罌をくらって壊滅する。同僚は座っている。これが、因果の豹の彼方への旅である。

一年を讃えよ。質量分布は茶色の昆虫の真理である。偽である。

17.

猫科の独裁者は月に斑点の針を打っている。裸体で汗を出す釣鐘を配る価値はない。幾つもの頭がすぐに酸欠で倒れる。給食は無料で、芋と満月に並ぶのは麗しき燻玉だ。時間は猫舌である。白い脳が極楽町にでかけると、船の半分は雑草と花の修練をしている。校長は縄跳びをして豆畳を背負う。如来が生まれた。

椅子男爵は歳をとってから蛇を足で立たせた。豹の前足は仏の嘘さえ是空である。

姉は回転し鳥の翼で追い続け宇宙の底になる。天気予報は道徳的で重力場の狸は言う。狐の文学である。

鼠数で数えられた空間振動数が森羅万象である。

大根の娘は概念。皆既日食は壊滅する。これが、因果の豹である。

一を讃えよ。昆虫の質量は嘘である。

18.

猫は裸で汗を注射する。幾つもの芋は猫舌である。極楽如来は花を背負う。男爵は舵を背負う。豹の前足は即ち空である。姉は底であり、道徳的で孤独の文である。鼠の振動は森羅万象である。大根は既に因果の的である。

讃えよ。質量は虚数である。

19.

猫は猫舌である。如来は空である。前足は姉であり、道徳的な孤独である。ネズミは森羅万象であり、大根は因果の的である。

質量は虚である。

20.

猫は虚である。